

京大広報

No. 485

京都大学広報委員会



大学本館より正門を望む（大正14年頃）

目 次

学部入学式における総長のことば……………969	附属図書館の日曜日開館について……………974
大学院入学式における総長のことば……………971	計報……………974
<大学の動き>	<資料>
部局長の交替等……………972	平成7年度入学試験諸統計……………975
<紹介>	<随想>
工学部における拠点大学方式による学術交流……………973	短期大学創設の思い出
	名誉教授 中戸 莞二……………979

学部入学式における総長のことば

平成7年4月11日

総長 井村 裕夫

桜の花が美しく咲き揃い、春もいよいよ酣となって参りました。本日は元総長、前総長、名誉教授の諸先生を来賓としてお迎えし、各学部長、教職員の方々の御臨席も得て平成7年度入学式を挙行し、2,980名の新入生と44名の編入生の皆さんを京都大学に迎え入れることができましたことを心から嬉しく思っています。小学校入学以来12年以上にわたって勉学にいそしみ、京都大学の入学試験に合格されたことに、心からおめでとうとお祝いの言葉を申し上げます。皆さんの成功は、強い意志と努力の賜物であります。そのことを皆さんは誇りに思っただけでよいではありません。

しかし私は二つのことを注意しておきたいと思えます。その一つは、皆さんが京都大学に入学するまでには、御両親をはじめ、先生、先輩や友人など、多くの人々の援助があったことに思いを致し、感謝をしなければならぬことでもあります。感謝することによって人は謙虚になり、謙虚になることによって人は更に成長することができます。第二に、入学試験は人間の能力のある一面だけを判断していると言ってもよいではありません。諸君はその他にも様々な能力を持っているはずであります。京都大学に入ったことに甘んずることなく、自らのさまざまな能力をのばして行って欲しいと願っています。

これから皆さんは京都大学で4年間、医学部の場合には6年間、勉強をすることになります。この期間は皆さんの人生の中で、恐らく最も大切な時になると考えます。それは学ぶ、すなわち知識を獲得するだけでなく、学ぶ方法を学ぶことができること、知識を創造する技法の基礎を学ぶことができることだからであります。皆さんの人生はこの4年間の過ごし方によって大きく影響されると言うても決して言い過ぎではないでしょう。

もう少し説明をしてみたいと思えます。今日まで皆さんは学校や塾の先生について、勉強をしてきました。それは教え手から学ぶことが最も効率よく知識を獲得することができるからです。教えられたことは真実としてほとんど疑うことなく、受け入れてきたであります。もちろんそうしないと入学試験で良い成績をとることが難しいに違いありません。

今日から始まる京都大学の生活でも、もちろん教え手の先生がいて、効率よく知識を注ぎ込んでくれるでしょう。しかし大学ではそのように受動的に知識を受け入れるだけでなく、能動的に学んでほしいと思えます。それは教えられたことに「何故」と疑問を持って、自分で考える努力をするということです。自分で問題を発掘し、自分で答えを探す勉強方法も身につけてほしいということでもあります。

京都大学がその100年に近い歴史の中で持った最大の哲学者は西田幾多郎先生であります。今年は先生が亡くなって50年になりますが、先生は恐らく近代日本の最大の哲学者であると言ってもよいではありません。先生は弟子に、「自分の哲学に追従してはいけません。自分の考えをそのまま受け取る必要は毫もない。君らが考える上に役立てば結構だ」と、常に言われたそうであります。もちろん哲学と他の学問の分野とは異なりますが、先生の意見を、学界の定説をそのまま受け取ることなく、時には疑って考えてみることは、どの学問分野でも必要であります。

西田幾多郎先生は明治3年(1870)、石川県でお生まれになりました。家は代々庄屋をつとめてきた旧家でありましたが、先生の若い頃に没落し、経済的にはかなり苦勞された時期もありました。先生は旧制の第四高等学校のとき、学校の規則が余りにも厳しいのを嫌い、「学問は独学でもなしとげられないことはあるまい」と考えて中退されました。そのため、東京帝国大学に入学できず、聴講生に近い存在であった選科に入られました。従って先生はほとんど独学で勉強されたということができましょう。若い頃から先生は大変勉強家で、多くのヨーロッパの哲学者の本を精読されました。しかし27歳のとき先生は日記に「他人の書を読まんよりは自ら顧みて深く考察するを第一とす」と書いておられます。多くの西欧の先哲の書を読みながらもそれに飽きたらず、当時の日本の現実の中で新しい哲学を模索されま

した。そして先生は次第に禪に傾倒され、20歳代の半ばから30歳代の半ばまでの10年近い間、学校の講義の時間を除いて、ほとんどの時間を坐禅、参禅のために使っておられます。先生の当時の日記を見るとひたすら禪の修行に打ち込んでおられる姿が明らかで、一つのことに打ち込まれる先生のエネルギーは驚くばかりであります。

明治36年(1903)一応の禪の修行を終え、先生は哲学、倫理学の研究に没頭されました。そして明治44年(1911)、41歳の時「純粹経験」という概念を基礎にして思索された結果を有名な『善の研究』という本にまとめて出版されました。それは京都帝国大学文科大学(文学部)の助教授に就任された翌年のことでありました。その後先生は更に思索を深められ、「場所」という新しい考えを展開しながら多くの著作を著わして、西田哲学と呼ばれる独自の哲学を築き上げられました。西田哲学は日本人が哲学の分野でも独創性を発揮しうることを示した最初の大きい哲学理論であります。そしてそこには先生が参禅によって悟入された禪の思想が、直接の形ではないとしても生きているところに西田哲学の特色の一つがあるのかも知れません。

私は今ここで西田哲学について論評しようとしているものではありません。それは私の能力を超える問題であります。私が申し上げたいことは、独創的な哲学を築き上げた先達が京都大学におられたこと、そしてその偉業は多くの書を学びながら、しかし他方では自分で深く思索することによって成し遂げられたものであることであります。それは若き日独立独歩で途を開く意気込みで四高を中退された先生の独立不羈の精神の生み出したものでもありましょう。そして今、時代はそうした独創的な思考のできる人材を求めています。

第二次世界大戦後の我が国はアメリカの強い影響のもとで発展をしてきました。学問はほとんどあらゆる分野でアメリカが先行しており、それに追いつくことが最大の課題でありました。産業も基本的にはアメリカの技術を導入しましたが、それを洗練し生産性を高めました。平均教育レベルが高く、集団行動に適した我が国の人材が、工業の高度化に有利であったと考えられます。その結果、世界有数の工業国家になることができたのであります。

しかし、今時代は大きく動いています。政治には何よりも我が国独自の強力な指導理念が求められています。外交面ではアメリカ、ヨーロッパとの協調体制を維持しながら、アジア諸国との関係をどのように築き上げて行くか、日本独自の外交政策をどのように進めて行くかが難しい課題となりました。学問でも科学技術の分野でも、もっと我が国独自のものを創造して行かない限り、次の世紀の我が国の繁栄は期待できないでありましょう。時代は明らかに、様々な分野で創造力のある人材、独創的な思考のできる人材を求めています。その為にはどうすればよいか、それは西田幾多郎先生に少しでもならうことでありましょう。もちろん我々凡人には先生のような独創的な仕事は出来ませんが、深く学び、よく考えることによって創造的な思考法をある程度は身につけることはできると思います。

論語の一節に「学而不思則罔、思而不学則殆」(学びて思わざれば則ち罔し、思うて学ばざれば則ち殆し)という言葉があります。京大の同窓会館である京大会館の入った所に、元総長平沢興先生の書で、この文章の額が飾られています。この言葉は学んでも自分で考えねば物事ははっきりしないこと、また考えるだけで学ばなければ、独断的になって危険であるということの意味する文章であります。学ぶことと考えること、そうした学問の方法は、すでに孔子の時代から続いているわけですが、それをこれからの京都大学における生活でしっかりと学んで下さい。京都大学はそうするには、大変適した場所です。それは個性的で、すぐれた先生や先輩が、数多く皆さんの周辺にいるからです。また日本の政治、経済の中心から離れているのでゆっくりと考える環境があるからです。

最後に西田先生の独立不羈の精神を示す和歌を一つ紹介致しましょう。

「人は人 吾は吾なり とにかくに 吾行く道を 吾は行くなり」これからの京都大学における生活の中で、わが行く道を見出して下さい。皆さんの学生生活が楽しく実り多いものになることを祈念して私の挨拶と致します。

大学院入学式における総長のことば

平成7年4月11日

総長 井村 裕夫

本日ここに元総長、前総長、各研究科長、教職員の御臨席のもと平成7年度大学院入学式を挙行し、修士課程1,688名、博士後期課程750名の秀れた諸君を京都大学大学院に迎えることができましたことは、まことに喜びとするところであります。今日までの諸君の努力に敬意を表するとともに、大学院の試験に合格され、めでたく入学されたことに心からのお慶びを申し上げます。

今日から諸君は大学院において勉強することになります。学問が大変進歩した現代では、学部で専門分野の最先端を学ぶことは困難であります。大学院に入って初めてそれぞれの専門の知識を深く身につけることができ、また研究を通じて新しい知識の創造に加わることができます。そこで研究生活における「読む」こと、「話す」こと、「書く」ことについて少し述べてみたいと思います。なお私が話すことは主として理科系の研究についてであって、文科系の研究には当てはまらないところが多々あることを、あらかじめお断りしておきたいと思います。

研究生活においては文献を読むことは大変重要であります。もともと研究は自分が知りたいと考えること、疑問に感ずることに対し解答を得るために行うものですから、すでに先人が同じ研究を行って明確な結論を得ているときには、その研究を行う意味がないと言って良いでしょう。従って研究を行う前にはその分野の研究がどこまで進んでいるか、類似の研究がなされていないか十分調べる必要があります。それと同時に研究の方法を決める必要があり、方法論に関する論文を注意深く読まねばなりません。研究を始めてなかなかうまく行かず、もう一度論文を読み直して見落としていた点に気づくことは時としてあるからであります。

最近は何の学問分野でも研究者の数が増加し、多くの専門雑誌が刊行され、情報量も著しく増えています。従って全ての論文に目を通すことは多くの分野で困難になっていると言えましょう。国際的な雑誌や評判の高い雑誌は良い論文が載ることが多いのでそれらを読むことをお勧めします。最近ではある雑誌に掲載された論文が他の研究者によってどの程度引用されているかという数値から、雑誌のインパクト・ファクターが計算されたりしていますのでそれを参考にすることも可能です。

研究が始まると、「読む」ことの意義は少なくなります。何よりも正確に、しかも着実に研究を進めねばなりませんし、得られた結果を深い洞察力で解析する努力をしなければなりません。時には研究が予想したように進まなかったり、思わぬ落とし穴があってそれを越える方法が見つからなかったり、再現性のある結果が得られなかったりで悩むこともあります。一旦研究が始まれば研究の遂行に全力を尽さねばなりません。やはり「読む」ことはある程度必要です。より良い方法論が発表されたり、類似の研究結果が報告されたりして、研究に軌道修正を加える必要が生ずることもあるからです。

「話す」ことは、研究生活では、また大変重要であります。研究の結果をまずセミナーやカンファレンスで発表し、更に学会で発表して批判を受ける必要があるからです。この場合データを十分整理して論旨を明確にし、聞く人に解りやすく話さねばなりません。

日本人は一般に発表に際して努力が足りないように私は思います。それを感じたのは今から30年ほど前、米国に留学していた時のことです。研究が一応まとまって学会に演題を提出する前になると、カンファレンスでまず発表しました。自分で図を書きスライドにして発表すると、散々批判され、何度も何度も図を書き直しました。やっと原案がまとまると大学のイラストの専門家によってその図がまた修正され、漸くスライドが完成しました。講演原稿も何度も手を入れられて完成すると、仕上げに大学のAV室でリハーサルをすることを奨められました。ビデオにとって見ると、講演の仕方のまづいところがよくわかります。アメリカ人が学会の発表を如何に大切にするか、よい発表ができるよう如何に努力

するかを知ることができました。

私の専門の領域で Grant Liddle という偉い学者がいました。彼のスライドはいつも簡明で、表の場合も行数が少なく必要な点がわかり易く呈示されていて、Liddle's slide と言われて有名でした。最近では日本人のスライドも大分良くなってきましたが、スライドははじめ発表技術にも十分な配慮が必要であります。

さて研究の最終のステップは「書く」ことであります。しかしこれも決して簡単な作業ではありません。時としては研究そのものよりも、苦渋を伴う仕事になることもあります。分野によって違いがあるでしょうが、現在のような国際的な時代には、研究成果をできるだけ英文で発表して、広く世界中の人に読んでもらう必要があります。そのためには英文の論文を書く練習をしなければなりません、これも慣れるまではなかなか骨の折れる仕事です。

理科系の論文を掲載する雑誌では、多くの場合ピア・レビューの制度があります。同じ分野の研究者による仲間うちの論文査読の制度です。本当の専門家が読むわけですから、極めて厳しい批判を受けるのが普通です。弱点は速慮なく突いてくるし、結論に飛躍があると鋭く批判するし、また実験の追加を要求することもしばしばあります。時には誤解されたり、理不尽な要求をされたりして、論争しないといけないこともあります。しかし多くの場合は妥当な指摘であり、修正することによって論文が良くなります。このようにして訓練されることにより研究の進め方、論文の書き方を学ぶことができ、研究者は少しずつ成長して行くものであることを、私は何度も論文を書いて身に沁みて感じました。

アメリカでは「論文を書かなければ滅びよ (publish or perish)」という言葉があります。これは論文の数を言っているのではなく、良い論文を書けと言っているものと私は考えます。一流雑誌の厳しいピア・レビュー制度は、研究者を鍛え上げてくれます。そこには単に論文を一編発表すること以上の意味があるように私には思われます。

今日私がお話したことは、研究の本質には直接関係はありません。研究において大切なことは未知の事実を発見したり、新しいコンセプトを構築したりすることでありましょう。しかしそれらを成し遂げることは決して容易なことではなく、周到なしかも創意のある研究者が、幸運にめぐまれて初めて成し遂げるものであります。本日私が申し上げたことは、そのような周到な研究者になるための一つの道であると考えます。注意深く、よく読み、考えを整理して説得力のある話をし、そして論旨の明快な論文を書く能力を身につけることは良い研究者の重要な条件でありましょう。

これからの大学院における生活が実り多いものとなることを祈念して、私の挨拶を終わります。



<大学の動き>

部局長の交替等

学生部長

瀬地山 敏経済学部教授（経済理論講座担当）が、5月1日学生部長に再任された。任期は平成8年4月30日までである。

防災研究所長

田中寅夫防災研究所長の任期満了に伴い、その後任として高橋 保防災研究所教授（砂防研究部門担当）が5月1日防災研究所長に任命された。任期は平成9年4月30日までである。

<紹介>

工学部における拠点大学方式
による学術交流

日本学術振興会はこれまで学術国際交流を目的として、二国間学術交流事業を支援してきたが、とくに発展途上国との学術交流の発展を図っている。工学部でもマレーシアとシンガポールを対象国として、それぞれ昭和59年、平成2年より「総合工学」の交流の拠点校として、協力校9大学とともに本事業の実施に携わってきた。工学部及び農学部の関係教官を中心に、マレーシアと研究者交流、共同研究、及びセミナーの開催を計画し、実施してきた。過去11年、両国の研究者交流により相手国へ訪問した研究者の総数は242名（日本より117名、マレーシアより125名）、また共同研究の実施により日本に滞在したマレーシアの研究者は89名である。またマレーシア（ペナン、クアラルンプール、ジョホールバル）で3回、京都で2回2年毎に計5回のセミナーを開催してきた。昨年12月にはジョホールバル市において3日間、本セミナーが開催され、日本、マレーシア、シンガポール3国から合計101名の参加者があった。京都大学からは、西川禰一工学部長をはじめ22名が参加し、(1)化学・化学工学、(2)生物学・生物工学、(3)機械工学、(4)電気工学、(5)土木工学の5つの分野に分かれて講演、研究発表及び討論を行った。学術交流は工学部のほとんどの教室が関係し、農学部の農芸化学、農薬を含め、多岐の分野にわたっており、本学の多くの教官の方々がこの事業の発展に貢献されている。日本学術振興会の各事業は10年毎に、事業の成果についてヒアリングを受けることになっているが、本事業も昨年諮問を受け、継続することになった。

過去10年間はマハティール首相の「ルック・イースト」政策に沿って、日本の技術立国政策を目標として熱い思いを寄せられた事実が存在するが、アジア諸国の技術水準の向上とGNPの上昇は目覚ましいものがある。同首相は世界情勢の変化を敏感に捉え、日本のみならず、手本とする対象国を世界に求めようとする「ルック・アラウンド」政策を打ち出し、2020年には先進諸国の仲間入りを宣言している。昨年のジョホールバルにおけるセミナーでは、マレーシアの講演者の最後のスライドに2020年を目指して研究を推進しようとする心意気が感じられる。

シンガポールとの学術交流は平成2年に開始され、主として研究者交流と共同研究の実施が中心であるが、両国間の協議に基づいて本事業を運営する方向に進んでいる。シンガポールにおいては急速な経済発展により、総合工学の中でも特にハイテクに深い関係をもつ分野との交流が望まれている。日本のアジア経済圏における位置づけをめぐり論議が続いているが、アメリカをはじめとする環太平洋諸国を含めて、政策の選択を迫られるであろう。したがって、日本の科学者はこれまでの先進欧米諸国一辺倒の立場を変え、科学技術の発展による恩恵をアジア諸国と共有するための役割を認識し、これまでのアジア諸国に対する科学技術政策の軌道修正が余儀なくされることは予想に難くない。21世紀に向けてこれまでの成果を基盤として、両国間の学術交流の活性化を図り、本事業の推進にあたる必要がある。世界情勢の急変と科学技術政策とは無縁でなく、科学者にとり開発途上国との学術交流のありかたを真剣に考えることは避けて通れない。アジア諸国との共存を念頭にいた科学技術政策の長期展望の組み立ては急務であり、有効な学術交流を深める以外に道はない。

(工学部)



附属図書館の日曜日開館について

附属図書館においては、5月から次のとおり日曜日開館を実施します。

記

開館開始 5月7日(日)より

開館時間 午前10時より午後5時まで

サービス内容

- 開架図書・雑誌の貸出(特殊資料は除く。)
- 開架図書・雑誌の返却
- 校費カードによるコピーサービス

なお、祝日にあたる日曜日及び夏季休業中の日曜日は、休館します。

(附属図書館)



附属図書館正面玄関

訃報**後藤康夫** 医学部附属病院助手

本学医学部附属病院助手 後藤康夫 先生は、4月18日逝去された。享年36。

先生は昭和59年3月本学医学部を卒業後、本学医学部附属病院産科婦人科での研修を経て、同60年10月より県立尼崎病院産科婦人科に勤務された。昭和64年1月1日より本学医学部附属病院産科婦人科医員として勤務され、平成4年9月1日

より本学医学部附属病院助手に就任された。

先生の専門は産科婦人科学で、培養実験により胚をとりまく子宮内環境を詳しく解析し、子宮内膜内胚移植法を考案し、臨床応用への理論的根拠を提示された。

平成4年より京都大学における体外受精のチームに就任され、着床不全の病態解明とその治療に心血を注ぎ、産科婦人科学界に多大の貢献をされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部附属病院)

〈資料〉

平成7年度入学試験諸統計

1. 募集人員、志願者数、合格者数、入学者数、合格者最高点・最低点（総点）等調

学部・日程	募集人員	志願者数	第1段階 選 抜 合格者数	受験者数	合格者数	入学者数	満 点	総 点		
								最高点	最低点	
総 人 間 学 部	前期 文系	55	210	201	198	57	130	800	556.83	446.5
	前期 理系	55	268	259	254	55		800	589.25	424.5
	後期	20	420	302	182	22		800	535.99	481.99
文 学 部	前期	190	725	665	663	193	224	700	518	429.33
	後期	30	442	282	137	31		700	535.75	468.5
教 育 学 部	前期	40	179	159	158	42	63	800	574.24	474.91
	後期	20	151	144	95	21		1,000	717.24	628.33
法 学 部	前期	340	1,028	1,028	1,015	345	395	750	552	452.25
	後期	60	592	512	214	50		13	500	396.75
				52	34	23	14			
経 済 学 部	前期 一般	160	592	592	580	161	234	800	552.25	462.5
	前期 論文	50	324	251	239	51		1,050	709.25	518.25
	後期	30	479	371	226	23		7	950	595.7
			41	27	25	12				
理 学 部	前期	294	989	960	948	295	326	650	567	333
	後期	32	1,266	1,236	830	33		400	264	221
医 学 部	前期	90	414	414	395	92	102	1,250	1,047	853
	後期	10	334	300	205	12		1,250	912.25	851
薬 学 部	前期	70	222	222	209	74	85	950	723.75	534.25
	後期	10	169	169	93	12		950	621.58	555.28
工 学 部	前期	940	2,729	2,722	2,676	940	1,051	1,000	787.58	531.25
	後期	110	1,530	1,527	827	117		1,100	846.75	713.25
農 学 部	前期	252	755	755	743	263	325	1,050	737.25	579.5
	後期	63	679	679	425	64		810	556.13	437.83
小 計	前期	2,536	8,435	8,228	8,078	2,568				
	後期	385	6,155	5,583	3,282	411				
合 計		2,921	14,590	13,811	11,360	2,979	2,955			

(備考) 1) 法学部、経済学部後期の下段は、外国学校出身者のための入学者選考を示す。

2) 合格者最高点・最低点（総点）は、前期は3月9日、後期は3月23日の合格発表時のもので、法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。

3) 特例入試を除く。

特例入試の実施結果（外数）

学 部	受入人員	申請者数	受験者数	欠席者数	合格者数	入学者数
法 学 部	若 干 名	1	0	1	0	0
工 学 部	若 干 名	2	2	0	1	1

<工学部・農学部学科別内訳>

学部・日程・学科	募集人員	志願者数	第1段階 選 拔 合格者数	受験者数	合格者数	入学者数	満 点	総 点		
								最高点	最低点	
工 学 部	前期	940	2,729	2,722	2,676	940	1,051	1,000	787.58	531.25
	後期	110	1,530	1,527	827	117		1,100	846.75	713.25
土木系学科	前	112	322	319		112	125		746.41	555.16
	後	13	179	178		13			787.75	718.25
衛生工学科	前	40	120	120		40	45		724.91	531.25
	後	5	65	64		5			796.5	755.5
資源工学科	前	36	190	190		36	39		693.5	541
	後	4	88	88		6			816	716.75
建築系学科	前	85	244	244		85	95		740.58	584.75
	後	10	128	128		10			772.75	713.75
物理工学科	前	232	760	758		232	260		768.5	587.25
	後	28	445	444		29			846.75	753.75
電気系学科	前	126	303	303		126	141		787.58	570.25
	後	14	140	140		15			797.5	716
情報系学科	前	90	213	212		90	101		778.08	581.41
	後	11	128	128		11			785	752
工業化学科	前	219	577	576		219	245		705.25	541.16
	後	25	357	357		28			798.25	713.25
農 学 部	前期	252	755	755	743	263	325	1,050	737.25	579.5
	後期	63	679	679	425	64		810	556.13	437.83
農 学 科	20	(前期 16名 後期 4名)				20				
林 学 科	20	(前期 17名 後期 4名)				21				
農 芸 化 学 科	64	(前期 52名 後期 13名)				63				
農 林 生 物 学 科	15	(前期 13名 後期 3名)				16				
農 業 工 学 科	41	(前期 35名 後期 8名)				43				
農 林 経 済 学 科	35	(前期 30名 後期 7名)				37				
水 産 学 科	23	(前期 19名 後期 5名)				24				
林 産 工 学 科	34	(前期 28名 後期 7名)				35				
食 品 工 学 科	38	(前期 31名 後期 8名)				39				
畜 産 学 科	25	(前期 22名 後期 5名)				27				

(備考) 特例入試を除く。

2. 志願者・入学者 出身高校所在都道府県別調

上段……志願者数
下段……入学者数

都道府県	学部											計	都道府県	学部											計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計			総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計	
北海道	13	28	6	21	20	54	5	4	60	17	228	近畿	三重	17	16	2	23	16	36	12	4	67	23	216	
	7	6	1	5	3	12	1		21	1	57		滋賀	13	18	8	30	22	26	5	7	97	38	264	
東	青森	4	3	4	4	8			2	6	31	京都	81	123	26	192	193	168	87	45	560	169	1,644		
	岩手		6	1		6	1		5	2	21	大阪	107	145	49	321	308	254	111	92	890	316	2,593		
北	宮城		12		4	5	9	1	12	1	44	兵庫	74	117	31	194	151	188	135	42	427	119	1,478		
	秋田	3	1		3	3	6				16	奈良	39	53	17	93	76	98	37	25	331	102	871		
東	山形	2	9		5		9	2	9	2	38	和歌山	11	14	2	16	9	27	5	12	45	12	153		
	福島	6	10	1	2	1	20	3	7	3	53	鳥取	6	5	4	17	4	17	1	1	12	7	74		
関	茨城	5	12	3	4	15	33	3	24	15	114	島根	7	7	4	8	4	10	5	2	14	10	71		
	栃木	4	12	2	9	8	13	7	4	17	6	82	岡山	20	19	3	33	17	32	11	5	76	25	241	
東	群馬	10	11	1	9	10	26	9	3	26	11	116	広島	24	23	2	52	16	60	24	14	110	21	346	
	埼玉	11	27	7	12	29	62	8	7	52	16	231	山口	3	5		12	2	10	1	4	26	7	70	
東	千葉	36	24	14	30	30	100	12	10	91	30	377	徳島	3	1	6	12	6	5	7	2	19	8	69	
	東京	99	91	30	86	120	249	68	13	173	76	1,005	香川	7	11	6	26	19	17	9	4	56	14	169	
中	神奈川	58	38	18	25	38	99	20	8	84	46	434	愛媛	5	18	6	7	10	11	11	2	51	17	138	
	新潟	13	9	1	11	7	35		5	14	9	104	高知	8	5	4	16	4	18	6	2	21	12	96	
部	富山	4	17	3	5	8	8	4	1	17	10	77	福岡	29	45	14	46	39	60	18	10	130	40	431	
	石川	3	8		10	9	23	3	4	51	6	117	佐賀	6	6	6	5	3	12	3	4	27	5	77	
東	福井	1	15	8	19	23	22	6	2	31	13	140	長崎	10	4	7	12	1	5	3	4	11	8	65	
	山梨	8	3	2	2	8	13	2	1	7	3	49	熊本	11	7		11	17	22	3	1	26	3	101	
東	長野	10	13	2	11	8	33	1	5	47	7	137	大分	3	4	1	10	4	21	7	3	11	5	69	
	岐阜	12	23	1	17	17	47	11	4	42	17	191	宮崎	5	5	2	5	6	15	1	2	11	2	54	
東	静岡	20	28	5	26	10	43	9	7	77	43	268	鹿児島	20	15	6	26	17	29	22	6	40	24	205	
	愛知	53	80	18	124	57	132	34	15	319	96	928	沖縄	4	1		4	1	6	1	2	5	3	27	
		13	13	3	26	8	28	3	4	86	31	215	検 定	10	12	1	13	11	35	12	5	18	9	126	
													そ の 他	1			52	41				3	1	98	
													合 計	898	1,167	330	1,672	1,436	2,255	748	391	4,259	1,434	14,590	
														130	224	63	408	241	326	102	85	1,051	325	2,955	

(備考) 1) 「その他」には外国学校出身者のための選考を含む。
法 学 部……志願者52名, 入学者13名
経済学部…… 〃 41名, 〃 7名
2) 高等専門学校出身者は, 高等専門学校の所在都道府県に含む。
3) 特例入試を除く。

3. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

検…入学資格検定合格者，専…高等専門学校出身者，他…高校，高専，検定以外の者

学部	志 願 者						入 学 者					
	総 数	現 役 7.3卒	浪 6.3卒	浪 5.3卒	浪 4.3卒	人 3.3以前卒	総 数	現 役 7.3卒	浪 6.3卒	浪 5.3卒	浪 4.3卒	人 3.3以前卒
総合人間学部	898	556	217	61	24	40	130	69	50	9		2
	検 10	検 2	検 2	検 4		検 2						
文学部	1,167	653	367	86	22	39	224	120	90	8	3	3
	検 12	検 7	検 1	検 4		専 1						
教育学部	330	187	99	26	5	13	63	40	16	5		2
	検 1	検 1										
法学部	1,672	996	510	85	28	53	408	220	169	18		1
	検 12		検 1		検 2	検 9						
経済学部	1,436	716	468	161	40	51	241	101	123	12	4	1
	検 11	検 1	検 5	検 3		検 2						
理学部	2,255	1,298	589	165	62	141	326	188	116	16	2	4
	検 35	検 13	検 12	検 2	検 2	検 6						
医学部	748	286	152	85	33	192	102	48	33	15	3	3
	検 12	検 2		検 4		検 6						
薬学部	391	194	115	24	21	37	85	51	34			
	検 5		検 1		検 2	検 2						
工学部	4,259	2,581	1,335	212	49	82	1,051	586	419	37	3	6
	検 18	検 5	検 6	検 1	検 2	検 4						
農学部	1,434	792	451	116	28	47	325	165	135	18	4	3
	検 9		検 4	検 3		検 2						
合計	14,590	8,259	4,303	1,021	312	695	2,955	1,588	1,185	138	19	25
	検 125	検 31	検 32	検 21	検 8	検 33						
	他 95	他 87	他 8				他 20	他 18	他 2			
	56.6			43.4			53.7			46.3		

(備考) 1) 外国学校出身者のための選抜を含む。

法 学 部……志願者52名，入学者13名，経済学部……志願者41名，入学者7名

2) 特例入試を除く。

＜随想＞

短期大学創設の思い出

名誉教授 中戸 莞二

退官直後からある短期大学（短大）の創設にかかわった。とは申しても、第一次の設置申請から一期卒業までという創学の始まりを経験したにすぎない。この間多くの方々のご指導ご協力をいただき、いまでも深く感謝している。創学の旅立ちは順調であったが、むろん難しさがなかった訳ではない。



まず、設置認可の時期が遅れることは、結果的に新設校の出鼻を挫くものであった。ご存知のように、公私立の短大の新設は大学設置審議会の議を経て決定される。具体的には係官の事前指導を得て膨大な書類を作製提出し、2年度にわたる審査が逐次進められていく。この懇切な指導と慎重な審査が高等教育の重要性によることは、もとより疑う余地がない。しかしその結果、認可証の交付が開学前年の年末近くになる。このことは、それまで学校紹介や学生募集の活動が一切できない新設校にとって大きな痛手となる。既にこの時期には私学既設校の一次入試が終っており、新設校は自校に相応しい学生を迎えることが難しくなる。しかもこの試練は開学年度にとどまらず、社会的評価を得るまで尾をひく。近く認可時期の繰り上げなどが実施されると聞かすが、既設校の入試以前に学校紹介を済ますことができるほどの改正を望みたい。

冗長になるが、学校教育法の第52条で大学の目的を“知的、道徳的及び応用的能力を展開させること”と規定している。そして第69条の2で短大について、大学は先の目的に代え“職業又は实际生活に必要な能力を育成することを主な目的とすることができる”としている。すなわち短大は職業等の専門教育を主目的とするが、法的に大学として位置付けられており、その基本的性格を具えなければならないこととなる。そしてここに短大教学の本質があるといえ

よう。しかしながら、この中間的な位置付けが短大の在り方を難しくしていることも、また事実だと思う。

創設にあずかった女子短大は企業経営で活躍できる職業人の育成を目指していた。それゆえ経営の基礎知識の修得と情報処理等の習熟のため、2年間の教育活動が重点的になされた。しかしこの職業教育においても、創造的知性を育もうとの意識、大学であろうとする姿勢が教職員のあいだに高まり始めていた。また余儀なく圧縮されている一般教育に、人文・社会・自然科学の諸分野からの輪講方式による通年講義“人間学”を開いた。これは人間としての在り方について学生の思考を期待する科目であり、学生の評価もよかったようだ。高度情報化に因應する職業教育であるがゆえに、愛に根差す豊かな人間性の涵養を教学の理念としていた。もとよりこれは一日で成るものではないが、教職員のご尽力にもかかわらず初代学長の責を果たすとは到底思えない。この理念が教学に定着することを期待するばかりである。

短大のほとんどが私立であり、実に9割以上の短大生が私学で学んでいる。国公立の大学とは異なり、私学では教学活動を支える健全な学校経営が不可欠な条件となる。いま私学について、1校、1学年あたりの平均在学学生数を比べると、修業年限の短い短大が4年制大学の半ばにも達しない（43%）。このように小規模なものが多き短大では、本来背反関係にないはずの教学と経営の間で学生定員にかかわる対立をひきおこしやすい。幸い、この難しさに当面することはなかったが、風聞する水増し入学は教学の質をたしかに低下させ墓穴を掘ることとなる。しかし反面、経営からみた適正規模の再検討が私学短大の今後にとって重要に思えてならない。

我が国には1,100校を超える大学があるが、短大がその半数を占めている。多様な高等教育の一翼を担う短大についてご理解を深めていただければ幸いである。

（なかと かんじ 元農学部長 昭和60年退官 専門は木材工学）